

## 『建礼門院右京大夫集』における虚構の問題

——隆信歌群をめぐる——

佐藤茂樹

従来隆信歌群<sup>(1)</sup>と考えられていた、一連の隆信との贈答歌は、近年修正が加えられているように思う。『中古三女歌人集』(日本古典全書)<sup>(2)</sup>において示されてはいたが、上條彰次氏が、隆信歌群中の一四六・一四七と一五三、一五四とは隆信との贈答ではなく、『王葉集』記載通り、資盛との贈答であると説かれた御論を支持する論が見られるのである。<sup>(4)</sup>確かに、『右京大夫集』は構成的な作品であるが、資盛を追憶するというテーマの中にあつて、いわゆる、隆信歌群が想定されていたかは疑問である。資盛との恋の初めの頃、関係した恋として隆信は存在し、その苦悩の時期の思い出として、資盛と隆信との恋は並立的に捉えられたものとも考えられる。むしろ、「資盛・隆信歌群」<sup>(5)</sup>として捉えるべきであるかもしれない。

但し、そうしても、隆信との恋を語る理由は明確ではない。<sup>(6)</sup>この書に見える資盛への愛の純粋性が損われてしまうと思われるからである。そこで、本稿では『右京大夫集』と『隆信集』とを対照しながら、『右京大夫集』の虚構の跡を確認し、『右京大夫集』における隆信との贈答歌収載の意味を考えたい。

### 一

糸賀きみ江氏が「藤原隆信に思はれて」<sup>(7)</sup>と題された右京大夫と隆信との出会いの場面である。

『右京大夫集』

そのかみ、思ひかけぬ  
ところにて、よ人より

『隆信集』

ある宮はらにて、女あ  
また物かたらひて帰に

も色好むと聞く人、よしある尼と物語りしつゝ、夜もふけぬるに、近く人のあるけはひのしるかりけるにや、頃はうづきの十日なりけるに、「月のひかりもほのぼのにて、けしきえ見えじ」などいひて、人につたへて。その男はなにがしの宰相中将とぞ。

135 思ひわくかたもなきさ  
による波のいとかく袖を  
ぬらすべしやは  
と申したりしかへし

136 思ひわかてなにとなき  
さの波ならばぬるらむ袖  
のゆゑもあらじを

137 もしほくむあまの袖に  
ぞ沖つ波心をよせてくだ

しあした、中にすぐれ  
てきこえし人にいひつ  
かはしつ、

665 思ひわくかたもなきさ  
による浪のいとかく袖を  
ぬらすへしやは  
かへし

666 おもひわかてなにとな  
きさの浪ならばぬるらん  
袖のゆへもあらしを  
又をししかへして

くとはみし  
また、返し

138 君にのみわきて心のよ  
る波はあまの磯屋に立ち  
もとまらず

667 君ならて誰にか袖をか  
こつへき猶思ひわくかた  
はなければ  
この返事は、いかにい  
ふへしとおもほえず  
とて

668 うつろはんことこそか  
ねてうかりけれ色なる人  
のちらすことのは  
またこれより」

669 うつろはむことなおも  
ひそ浅からぬ色をは色に  
そむとしらずや

状況の説明は、歌のやりとりが、当日か翌朝かといった違いはあるが、<sup>(8)</sup>記述に矛盾はない。最初の贈答歌も共通している。まず、『隆信集』を見ると665歌典において隆信は、

理性を失くすまでの一途な心を、「思ひわくかたもなき」によって表現している。それに対して、右京大夫は666歌共において、「思ひわくかたもなき」を一途さではなく、無分別に誰彼なくと解して、隆信の真率さを実のないものとして一転させている。そこに、贈答歌としての当意性がうかがえる。

次に隆信は667歌「君ならて誰にか袖をかこつへき」として、直情的に愛を語り、再び、「猶思ひわくかたはなければ」と詠みかけ、右京大夫の「思ひわくかた」の理解が誤解であることを訴えている。隆信の「思ひわくかた」の自説の固執のためか、又は、自らの趣向が否定されたためか右京大夫は、「この返事は、いかにいふへしともおもほえずとて」と記されているように、隆信の667歌に対して直接的な返歌はしなかったようである。そのかわり、

668 うつろはんことこそかねてうかりけれ色なる人の

ちらすことのは

の歌を詠みかけている。「うつろはんことこそかねてうかりけれ」と右京大夫は、隆信の移り氣に對する不安を語っている。心うちとけ、心中を明かしたのである。それに對して、隆信は669歌「うつろはむことなおもひそ」として、その懸念を直接的に否定している。誠実に、真心を尽くし

て説得している風である。右京大夫が、隆信の愛を受け入れる直前の状況がこれらの贈答歌からうかがえるように思われる。右京大夫が心を許すのが早いと思われるが、恋の贈答における通常の流れをたどっていると言える。

一方、この部分『右京大夫集』では、『隆信集』に見え  
136 思ひわかでなにとなぎさの波ならばぬるらむ袖の  
ゆゑもあらじを

137 もしほくむあまの袖にぞ沖つ波心をよせてくだく  
とはみし

であつて、右京大夫は、隆信に對して真正面から向き合っていない。むしろ、「あまの袖にぞ」、「心をよせてくだくとはみし」と、はぐらかすような形で応答している。隆信の求愛を軽くあしらっているのである。先学によって説かれていく如く、『右京大夫集』にあつては隆信に對して、徹底して冷淡な態度を貫いているのである。『右京大夫集』においては、隆信のつけ入るすきは全くないのであり、恋の贈答歌における初期の段階と言える。

ところで、『右京大夫集』の135歌から138歌は、隆信の135歌に對して右京大夫が136歌、137歌の二首を返し、隆信が138歌を送った体裁になっている。この点について、村井順氏

は

隆信は作者に一首送っているだけなのに、作者は二首返している。これを見ても、作者が隆信に好意を持っていたことがわかる。『隆信集』には、「またまたも、この女のもとへ、たびたび文をやりて、ねんごろにいひわたりしに、返りごともいとこまやかにて」ということばも見える。右京大夫も決して冷淡ではなかったようだ。<sup>(9)</sup>

と考えられている。久保田淳氏は

好意を示す隆信に対して、右京大夫が表面は厳しく応酬しながらも、そのことを内心快く感じたであろうことは、女性一般の心理に照し合わせても言えると思うが、隆信が「思ひ分くかたも渚に」という歌をよこしたのに対し、御丁寧にも……二首の歌を返していることから、十分想像されることである。……右京大夫集一三六番に対応するのが隆信朝臣集での「又をしかへして」の歌「さみならで誰にか袖を」であり、一三七番に対応するのが一三八番であると思う。右京大夫が二首返してくれば、隆信も当然二首を「をしかへして」よこすのである。<sup>(10)</sup>

と考えられている。樋口芳麻呂氏は

だが、初対面の、しかも色好みとかねて評判の男から歌一首を送られて、女が無警戒に、積極的に、余分の歌までよんで返すであろうか。どうも考えにくいのはなかるうか。(1)「思ひわく」の歌―筆者注―への返歌は(2)「思ひわかで」の歌―筆者注―一首で、「又をしかへして」隆信から送られた「君ならで」(3)に対する答歌が「もしほくむ」(4)の詠なのである。<sup>(11)</sup>

と考察されている。<sup>(12)</sup> それぞれ特徴のある御論であるが、

『隆信集』を信じる限り、隆信の667歌「君ならで」の返歌は137歌「もしほくむ」ではない。『隆信集』に「この返事は、いかにいふへしとおもほえずとて」として、667歌「君ならで」の返歌は668歌「うつろはんことこそかねて」と記しているからである。『隆信集』にも自己美化的虚構の可能性は考えられる。<sup>(13)</sup> 事実を伝えるより、家集としての完成に心を砕いたかもしれない。しかし、この詞書の率直さや意外性は真実を示しているように思われる。隆信の667歌「君ならで誰にか袖をかこつへき」といった、強引で直情的な言い様に、更に「猶思ひわくかたはなければ」といった「思ひわくかた」への執着に、右京大夫は666歌典「おもひわけてなにとなきさの」で見せたような趣向を着

想出来なかったため、返歌しなかったのではないだろうか。そして、隆信の真剣な求愛を、趣向によつてはぐらかすことにためらいを覚えて、右京大夫は668歌「うつろはんことこそかねてうかりけれ」のような真実の心の内を吐露し、隆信の愛を試そうとしたのではなかったろうか。そして、そのことは670歌の詞書に示す「返事もいとこまやかにて」へとつながる前段階であるように思われる。同時に、「また／＼も、この女のもとへたひ／＼文をやりて」というのは、688歌「うつろはんことこそかねてうかりけれ」の右京大夫の心が自分の方に向いてきたことを感じた隆信が、この機会を逃すまいと、この機に乗じて665歌から669歌の贈答歌以後、執拗に手紙を送ったことを示すのであろう。二人の出会いでの贈答は665歌から669歌のやりとりが真実の姿ではなかったろうか、少なくとも全体の一連の流れの初めの部分ではあったらうと思われるのである。

即ち、『右京大夫集』の贈答のあり様は真実の姿を伝え

てはいない。右京大夫は隆信に対して、徹底して冷淡な態度を貫いた如く描かれ、資盛への貞操を守ったように虚構化して描かれている思われるのである。

では、『隆信集』668歌「うつろはんことこそかねてうかりけれ」のような、右京大夫が心のすきを見せている歌は『右京大夫集』では次の歌である。

そぞろきぐさなりしを  
ついでにて、まことし  
く申しわたりしかど、  
「よのつねのありさま  
は、すべてあらじ」と  
のみ思ひしかば、心強  
くて過ぎしを、この思  
ひのほかなることを、  
はやいとよう聞きけり。  
さて、そのよしほのめ  
かして、

139 浦やましやかなる風の  
なさけにてたく藻のけぶ  
りうち靡きけむ  
かへし

140 消えぬべきけぶりの末

また／＼も、この女の  
もとへたひ／＼文をや  
りて、ねむころにいひ  
わたりしに、返事もい  
とこまやかにて、たく  
もの煙にはいか、思た  
つへきを、あつまと  
き、しかはとて、思ひ  
たえなんもいか、はせ  
んといひたりしを、き  
くことや有けむ  
670 浦山しいかなるかせの  
なさけにかたくものけふ  
りうちなひくらん

は浦風に靡きもせずてただよふものを

また、おなじことをいひて、

141 あはれのみ深くかくべき我をおきてたれに心をかはすなるらむ

かへし

142 人わかずあはれをかはすあだ人になさけしりても見えじと思ふ

かくいひても、猶あかす覚えて  
あつまちときくにいと、そたのまる、あふく  
ま河にあふせ有やと

139 歌共「浦やまし」において、隆信は、右京大夫と資盛との仲を「羨ましい」と言い、「いかなる風のなさけにてたく藻のけぶりうち靡きけむ」と右京大夫が、自分ではなく資盛の愛を受け入れたことを皮肉的に語っている。その返しとして、右京大夫は140歌「消えぬべき」において、

「浦風に靡きもせずてただよふものを」と、資盛との情交を否定し、もったいぶった言い様ともなっている。<sup>13)</sup>又、自らを「消えぬべきけぶりの末」と規定している点に、隆信の真意を試すような、隆信につけ入るすきを与えるような歌になっている。

139 歌同様、隆信は141歌「あはれのみ深くかくべき我をおきてたれに心をかはすなるらむ」において、自分をこそ愛すべきなのに、誰と心を交しているのかと右京大夫につめよっている。詞書に、「また、おなじことをいひて」と記すように、隆信が右京大夫と資盛との情交を知っていることが前提となっていることによつて、この歌も、右京大夫に対する皮肉がうかがえる。141歌「あはれのみ深くかくべき我をおきて」に対する142歌「人わかず」は、隆信を「人わかずあはれをかはすあだ人」として、突き放し、拒絶している。確かに、糸賀きみ江氏が前掲書において言われるように、「うるさそうに、はねかえす調子を感じられる」のであるが、「なさけしりても」には、隆信の愛を受け入れる心づもりがあることが表明されているのではないだろうか。それを直接表明することは憚られ、「見えじと思ふ」として虚勢を張つたように思われる。

ところで、142歌の「人わかずあはれをかはすあだ人」と

は資盛のことを指すとして、上篠彰次氏は前掲論文（註3）において考えておられる。隆信は、右京大夫と資盛との噂を聞いたとして、「そのよしほのめかして」言い寄つて来たのであるから、二人の贈答の話題の対象は資盛であることを根拠においておられる。そうすると、140歌「消えぬべきけぶりの末」は身の不安定さへの歎きは見えるものの、資盛との噂を打ち消した弁明の歌となる。又、142歌「人わかず」は、資盛への愛を告白しつつも、そのことを知られたくない秘密のこととすると宣言しており、隆信は全く右京大夫の眼中にはないことになる。そう読めば、確かに詞書に記す、「心強く過ぎし」という具体的な態度を二度の贈答の中で示したと言える。ただ、詞書において、あえて「心づよくてすぎしを」と記す心理を思えば、「心づよくてすぎし」ことを歌うのではなく、逆に、不覚にもそう出来なかつたことを歌うのではないかと思われるのである。「心づよく」いるつもりが、資盛との関係をちらつかせて迫る隆信の計略にはまって、心ひかれてしまった後悔や弁明の気持ち、詞書に「心づよくてすぎしを」という表現になって表われたものと思われる。

140歌において右京大夫は、自らを「消えぬべきけぶりの末」として、より所のないはかなげな存在と見ている。資

盛との関係にあつての真実の思いであつたとしても、そこに隆信につけいるすきを与えていることは否めない。「心づよくてすぎし」というには少し、身の不安を歎く気持ちが強いように思われる

以上139歌・142歌までの贈答歌は、隆信の求愛を受け入れてはいないが、140歌には右京大夫の身の不安定さ、142歌には思わせぶりがうかがえる。135歌・138歌までの贈答歌で見せた、右京大夫の徹底した拒否とは様相を異にする。

135歌・138歌においては、右京大夫は隆信の求愛に対し、機智的に応答していたのに対して、140歌・142歌においては、むしろ素直に自己の心を表白している。隆信の求愛に対して、右京大夫の心は揺れていると想像される。ここに、恋の展開のあり様がうかがえるのである。

ところが、引き続く、

祭の日、おなじ人、

143 ゆくすゑを神にかけても祈るかなあふひてふ名をあらましにして

かへし

144 もろかづらその名をかけて祈るとも神のこころに受けじと思ふ

の贈答にあつては、右京大夫は再び、隆信を強く否定して

いる。144歌「もろかづらその名をかけて祈るとも神のころに受けじとぞ思ふ」と、隆信の入る余地は全くないほどに拒絶しているのである。135歌・138歌、そして139歌・142歌と展開してきた恋愛の流れからすると、143歌・144歌の贈答歌は逆行している。この点について、野沢拓夫氏は、

この144番の歌は、前年の治承元年夏、つまり隆信との出会いから間もない頃のものものではなからうか。ではなぜこのような配列がなされたのかといえ、それは一つには、この記事中の隆信の歌、

143ゆくすゑを神にかけても祈るかなあふひてふ名をあらましにしての傍線を付した部分の隆信の意の強調にあると思われる。つまり自分はこんなに隆信に意を尽くして請われたのだということである。またいま一つには、自分はそうした求愛に対しては、常にこうした態度をとってきたのだということを示そうという意図が<sup>(16)</sup>あつてのことと思われる。

と考えておられる。又、上篠彰次氏は前掲論文（註3）において、

ここでは、隆信の求愛に対して右京大夫が強い拒絶反応を示し、前行歌群に観取された基調に反するともいえる点に注意される。だがこれについても、彼女の心

がすでに隆信に傾いていたが故に生じた精神的ゆとりによる、一種のじらし的技巧（こうした知的応酬が、王朝的伝統世界における教養ある女性に期待された恋のあり方であつた）の現れと解するか、さらに、次の一四五番歌に具現された隆信との契りを、心ならずものことであつたと強調する意識も存しての意図的構成であつたとも解するが、ともかく前行歌群の流れに合理的に位置づけての受容が可能であつたと考えられるのである。

と考察されている。

ところで、一方『隆信集』では、143歌「ゆくすゑを神にかけても」、144歌「もろかづらその名をかけて」の贈答歌は収載されていない。『隆信集』においても、こうした右京大夫の強い拒否の歌は、恋の初めの頃の贈答歌にしかそぐわないものと思われる。隆信に心の傾きかけた頃の贈答とは考えられないのである。隆信に少し心を開きかけたことは真実であり、それを打ち消そうとして143歌・144歌はここに配置されたものと思われる。右京大夫は隆信との恋の真実のあり様を隠し、虚構的構成により、徹底して隆信の求愛を斥けた姿を描きたかつたのだらう。



『右京大夫集』139歌と『隆信集』670歌は同じ和歌でありながら、詞書は違っている。『右京大夫集』は次のようである。

そぞろきぐさなりしをついでにて、まことしく申し  
わたりしかど、「よのつねのありさまは、すべてあ  
らじ」とのみ思ひしかば、心強くて過ぎしを、この  
思ひのほかなることを、はやいとう聞きけり。さ  
て、そのよしほのめかして、

139 浦やましいかなる風のなさけにてたく藻のけぶり  
うち靡きけむ

「まことしく申しわたりしかど」というように、隆信の  
情愛ある熱烈な求愛に対して、『よのつねのありさまは、  
すべてあらじ』とのみ思ひしかば、心強くて過ぎし」と、  
右京大夫は隆信の愛を拒絶していた。しかし、「この思ひ  
のほかなること」、即ち資盛と右京大夫との恋愛関係のこ  
とを隆信は早くも聞きつけて、そのことを種にして関係を  
迫ろうとして、139「浦やまし」の歌を贈った。この歌は、  
「羨ましいことだ。どのような男性の情愛によって、あな  
たは靡いたのだろうか。」という意で諸注一致している。

一方、この詞書は『隆信集』では次のようになってい

また／＼も、この女のもとへたひ／＼文をやりて、  
ねむころにいひわたりしに、返事もいとこまやかに  
て、たくもの煙にはいか、思たつへきを、あつま  
き、しかはとて、思ひたえなんもいか、はせんとい  
ひたりしを、きくことや有けむ

670 浦山しいかなるかせのなさけにかたくものけぶり  
うちなひくらん

かくいひても、猶あかす覚えて

あつまちときくにいと、そたのまる、あふくま河  
にあふせ有やと

この詞書、特に、右京大夫の手紙の内容を示す、「たく  
もの煙にはいか、思たつへきを、あつまとき、しかはとて、  
思ひたえなんもいか、はせん」は脱落等があるのではない  
かと推測され、難解とされている箇所である。この詞書に  
ついて考察された先学の論をあげると、久保田淳氏は前掲  
論文（註10）において、次のように考察されている。

「どうして、海人の焚く藻の煙のようにはつきりと  
（あなたへの）恋心をあらわしましょうか、あなたが  
東国へいらつしゃると聞いたからといって、（遠く  
なってしまうので）あきらめてしまおうとしても、どう

しましうか（どうしようもないでしう）」などという意味であろうか（或いは、「あづま」には「妻」が暗示されているか）<sup>(17)</sup>。

樋口芳麻呂氏は前掲論文（註11）において、

人しれぬ身は急げども年をへてなどこえ難きあふ坂の  
関

（後撰・恋・七三二・伊尹朝臣）

東路に行きかふ人にあらぬ身はいつかはこえむ逢坂の  
関

（後撰・恋・七三三・小野好古朝臣女）

逢坂は東路とこそき、しかど心尽しのせきにぞありける

（後拾遺・恋・七四八・左京大夫道雅）

を参考にして、「あづま」は『逢坂の関』——男女が逢う意味を懸ける——の向こうの地、すなわち逢いたくても手の届かない彼方を譬喩的に述べているのであろう」と考えられ、

たくもの煙が浦風になびくように、心弱くほかの男になびこうとは決して思いませんが、あなたがわたしのことを、「あづま」にいる（逢坂の関の彼方にいる。すなわち逢うことがむづかしい）と評判に聞いたから

というので、断念しようとなさるのでしたら、それもやむを得ません（どうぞ御随意に）。

と考察されている。三木紀人氏は

この「あづまぢ」は、異性との肉体関係を持ったことを暗示する語であろう。「あづまぢ」は「逢坂」<sup>(18)</sup>（男女が逢うことの比喩）の彼方を指す名だからである。

と考えられている。上篠彰次は前掲論文（註3）において、『後拾遺』の道雅歌に重点をおき、「聞く」及び、「思ひたえなん」の主体は右京大夫であるという観点に立つて、

逢坂（契りを結ぶこと）は「あづまとこそき、しかと心つくし」（東と西国の筑紫を対比した趣向）のせき」とも聞いたので、私もそのように種々障害にぶつかり気を揉むこともあろうかと悩んで

と考えておられる。草部丁巳氏は前掲書（註6）において、「あづまとき、しかば」、「きく事やありけむ」は「東路の歌の詞書の一部が錯入」と考えられ、

心弱い女心では、どう決心してよいか、判断に迷うのですが、と言って、このまゝ、思い切つて、あきらめてしまふのも、私には出来そうにありません、どうしたらよいでしうか

と考察されている。岡崎三智氏は前掲論文（註12）におい

て、

たくもの煙のように他の男性に想いをよせたりは、決していたしません、私が（資盛）と契りを結んだと聞いてあきらめてしまうのでしたら仕方ありません。と考えておられる。それぞれ違いがあり、特色ある御論だと思うが、「浦やまし」の歌に対しては、ともに『右京大夫集』と同じ意味で解釈されている。

ところで、同じ歌に対して、二つの違った詞書ということはあり得るのだろうか。草部了円氏は前掲書（註6）においてその可能性を説いておられるが、二つの詞書に対して二つの歌、即ち、「浦やまし」の歌は、『右京大夫集』と『隆信集』とでは意味が異なっているのではないかという可能性を考えて、改めて、『隆信集』の詞書について考えたい。

まず、「あづま」、「あづまぢ」は、「あづまぢのみちのはてなる」（新古今・一〇五二）と表現され、確かに、樋口芳麻呂氏が説かれたように、「都から遠く離れた地」といった意味、「あづまぢのはまなのはしを」（後拾遺・五一六）の如く、「あづま」の歌枕を詠むといった用法、「あづまぢのさやの中山」といった序詞としての用法、三木紀人氏が説かれたように、「異性との肉体関係を持ったことを

暗示する語」、更に、「あづまごと」の意を示す用法がある。但し、次の

(1) 『中納言兼輔集』 八五

つねにあひしりたりける女の、いかがありけん、  
ふすべければ

あづまぢのあるかなきかをしらぬまはいとふにきたる  
物にざりける

(2) (兼輔Ⅱ一六八いとふに、たるものにそありける)

『藤六集（輔相）』三

かにかへる

あづまぢのうちかたらひてかへるには□□つくるひと  
なりけり 本に本

(3) 『堀河院百首和歌』 一二一六 河内

遇不逢恋

相坂の関はこえにしあづまぢをなど今更に又まよふら  
ん

(4) 『言はで忍ぶ』 二二〇 嵯峨の院

あづまぢとちぎらぬ中はいまさらになみこすそゑもそ  
でやぬるべき

のうち、(1)(2)の「あづまぢ」は「妻の」の意、(3)(4)は「夫婦、夫婦関係」を表わしていると考えられる。このように、

僅か四例ではあるが、「あづまぢ」という詞には、地理的イメージからの用法だけでなく、語感を活かした「あづま」の「つま」からイメージされる、「妻」及び、「夫婦」、「夫婦関係」といった意味の用法があるように思われる。

以上のことを踏まえ、『隆信集』の「あつま」とは、「よ人よりも色好む」という隆信の「妻」（もしくは右京大夫以外の肉体関係のある女性のことであり、右京大夫の「いとこまやかな返事」とは、

「たくもの煙にはいか、思たつへきを、あつまとき、しかは」とて、「思ひたえなんもいか、はせん」といひたりしを、きくことや有けむ

と考え、「たくもの煙にはいか、思たつへきを、あつまとき、しかは」及び、「思ひたえなんもいか、はせん」の二ヶ所である。この二文の間の「とて」は、隆信の詞書の地の文であり、更に、「きくことや有けむ」とは、右京大夫の手紙により、右京大夫は自分の妻や女性関係、もしくは好色性のことを聞き及んだのだらうかという、隆信の感想であると考え、次のように詞書を解釈したい。

「恋を打ち明けられた女心としては、どう決心すべきかと思いますが、あなた（隆信）には妻がいるという噂を聞きましたので」と言つて、「あなたのことを諦

めるのも（決心がつかず）、どうしましようか」と（もったいぶった手紙を）寄こしたので、私（隆信）の噂を右京大夫は聞いたのだらうか。

『右京大夫集』では、隆信の求愛を強く拒んでいる右京大夫像であるのに対し、『隆信集』では、隆信の心を試すような、誘うような趣が見え、媚びている右京大夫像がうかがえる。こうした詞書の相違は、それぞれの思い込みによるとも考えられるが、『右京大夫集』の日記的性格、及びこれまでの意図的に構成された隆信歌群のことを考えると、『右京大夫集』の方がより虚構化が著しいと思う。以上のような詞書の解釈に立つて『隆信集』の二首の歌を考えると、

670 浦山しいかなるかせのなさけにかたくものけふり  
うちなひくらん

かくいひても、猶あかす覚えて

671 あつまちときくにいと、そたのまる、あふくま河  
にあふせ有やと

羨ましいことですね。どのような男（私）の情愛によつて、女性が心を許しているのでしょうか。（私はそれほどの男ではありませんよ。）

こう言つてもまだ十分ではないと思われたので、

私には妻がいると聞くと、ますます頼みに思います。  
(妻とはあなたしかいないのだから) 東路にある「あぶくま河」のように、あなたと逢うことが出来るのだと思うと

のようになる。『右京大夫集』では、隆信が右京大夫と資盛との恋愛に嫉妬しつつ、関係を迫る歌であったのに対し、『隆信集』では右京大夫から好色性を責められて、そのため、この世には羨ましい男もいるものだ、しらばつくれた歌になるという違いが生じている。これは、隆信の歌を右京大夫の都合の良いように変えるという大胆な虚構が行なわれているからだと考えられる。

では、どうしてこうした虚構化が行なわれ、隆信の「浦やまし」の歌の意味が取り換えられるような作為がなされたのだろうか。『隆信集』には、『右京大夫集』に記された、「この思ひのほかなることを、はやいとよう聞きけり」という意味が認め難いことを考えれば、隆信が右京大夫と資盛との恋のことを聞きつけたということを右京大夫は記しなかったからではないだろうか。それは、右京大夫の願望であり、不確実な資盛との関係を既成の事実にしたいという願いのなせるわざではなかったろうか、都落ちする以前の資盛は右京大夫が思っているほど彼女を愛してはいな

かった。それほど愛されてはいないという不安が、二人の間には、衆人が認めるほどの恋愛関係があったという、悲しい観念的操作をなさしめたのではないだろうか。右京大夫と資盛との恋を自明なものとさせるために、「浦やまし」の歌、及びその詞書は必要であったと思われるのである。即ち、隆信との恋の顛末を記すことが目的なのではない。ここまでの『右京大夫集』に見える、隆信との恋のあり様は徹底した拒否であった。しかし、『隆信集』を見る限りこうしたことはうかがえない。右京大夫は、事実を隠し、決して、隆信に心惹かれたり、隆信を受け入れたりしなかったことを『右京大夫集』で表明しているのである。

#### 四

かやうにて、何事もさてあらで、かへすがへすくやしきことを思ひし頃、

145 越えぬればくやしかりける逢坂をなにゆゑにかは

踏みはじめけむ

詞書の「何事もさてあらで、かへすがへすくやしきことを」は、「こういうあんばいで、結局許さねばならなくなつたのですが、その後万事思うようにゆかなくて、何と考へても残念なことだと思つていた頃<sup>(22)</sup>」と考えられている。

145歌「越えぬれば」の歌は、隆信と契りを結んだことを後悔している歌だというのである。確かに、恋の展開にあつて、女性が男性の愛を受け入れた時、二人の立場は逆転する。その時、男性の心は自分ないことを悟つて、女性はその契りを後悔する。この歌もそうした分岐点を表す歌で、右京大夫と隆信との恋も、世間一般の恋の過程を辿つたと考えられるのであろう。しかし、このことは真実の出来事であつたとしても、『右京大夫集』には、そうした展開の跡はうかがえない。「かやうにて」が指示する内容は、135歌「思ひわくかたもなぎさに」の発端から、144歌「もろかづらその名をかけて」までのことである。これは先程見たように、虚構化された、右京大夫の隆信に対する強い拒否の姿勢が描かれているのであつた。「かやうにて」とは、「こういうあんばいで、結局許さねばならなくなつたのです」ではなく、逆に「こういうように、隆信は執拗に迫り、私は強く拒んで」という意味ではないかと思われるのである。この一文、「このやうで、この隆信とのことは拒絶してすんだのであるが、資盛との間がらについては、とかく思ふやうでなくて、前の世の契りにまけて縁を結んだことを悔しく思つてゐたころ」（『中古三女歌人集』日本古典全書）と解釈されているように、「（隆信とは）かやうに

て、（一方、資盛とは）何事もさてあらで」という構造で  
あると考えられる。

そして、145歌「越えぬれば」において、右京大夫は資盛との契りを後悔しているのである。確かに、この145歌「越えぬれば」の歌は、直前までの隆信との贈答という流れを見れば、隆信とのことを歌つたと考えるのが筋である。<sup>24</sup>しかし、「かやうにて」が、隆信の求愛の拒否を表し、又、逆接でなく順接である以上、「何事もさてあらで」は隆信を拒否出来なくなつたという意味には解せないと思うのである。このように隆信の愛を否定して、何もかも今まで通り拒むことも出来なくて（契りを結んでしまつて）という文は成立しない。隆信の愛を否定していたけれども拒みきれなくなつてという文でなければ通じないはずである。この部分、直前までの流れから、隆信のことを語り、そして、隆信のことは眼中になく、自然と満たされない思いをもつ資盛へと心は飛んだのだらうと思われる。隆信との恋の後悔を語ってしまったのは、隆信を恋し、隆信に失恋したことが明白となつてしまふ。隆信との出会いから、144歌「もろかづら」の歌まで、右京大夫が構想したのは、色好みの隆信から「心強くて過ぎし」自分の姿であつた。それは資盛への純愛を貫くことであつた。こうした右京大夫のねらい

を、破綻させるような、隆信との恋の破局を描くことはありえないと思うのである。次に、

車おこせつつ、人のもとへ行きなどせしに、「主つよく定まるべし」など聞きし頃、なれぬる枕に、硯の見えしをひきよせて、書きつくる。

146 たれが香に思ひうつると忘るな夜な夜なれし  
枕ばかりは

であるが、「主つよく定まる」とは、隆信の正妻が決まるというのか、資盛の正妻が決まるというのか、問題となっている箇所である。但し、『右京大夫集』においては、隆信とのことは、144「もろかづらその名をかけて祈るとも神のこころに受けじとぞ思ふ」で毅然としてはねつけ、それで済んだこととして処理されている。現実には、隆信の正妻の決定に失望感を味わったかもしれないが、『右京大夫集』では、隆信に失恋した惨めな自己を描くことはないのである。こうした論に立つ時、離れていった恋人の心をつなぎとめようとする146歌と154歌の贈答歌は隆信との贈答歌ではない。

145歌「越えぬれば」以後の詞書の表現には、隆信とも資盛とも分らない表現がなされている。誰かということとは、右京大夫にとっては自明のことであり、あえて記す必要が

なかったと考え、『隆信集』に見える贈答歌は当然、『右京大夫集』においても、隆信との贈答を示すと考えられたのである。例えば、

148 もろともにこと語らひしあけほのかはらざりつ  
るほとぎすかな（隆信集）あか月のおなし声な  
る）

149 思ひいでてねざめし床のあはれをも行きてつけ  
るほとぎすかな

は『隆信集』にもあり、確かに、隆信との贈答歌であったはずである。しかし、『右京大夫集』収載にあたつて、右京大夫がねらつたことは、資盛との恋に苦しむ自己の造型であった。繰り返すが、『右京大夫集』においては、隆信との間には恋愛関係は存在しない。執拗な隆信の求愛を許さず、生涯を資盛に捧げたという、理想的自己像を『右京大夫集』において作り上げたのであった。そのための方法として、隆信との贈答歌を資盛との贈答歌へと読み替えたのであった。加えて、資盛への追憶に彩られた下巻に比して、上巻には、資盛との思い出となる記事が少ない。しかも贈答歌は二組だけである。その不足を補うために、隆信の歌が資盛の歌として利用されたと思われるのである。

隆信の登場の「その男はなにがしの宰相中将とぞ」とい

う一文は、後人の加筆と考えられているが、「よ人よりも色好むと聞く人」として、人名を明かしてはいないが、人を特定しようとする意識がうかがえる。次に139歌「浦やまし」の詞書には、意識化された呼称は見えないが、流れから、「そぞろきぐさなりしをついでにて、まことしく申しわたりし」に、人物の特定化が図られているように思われる。以下、贈答にあつて、141歌詞書「また、おなじことをいひて」、143歌詞書「祭の日、おなじ人」として、人物の個別化が見える。

一方、資盛に対しては、158歌詞書、「父おとどの御供に、熊野へまゐると聞きしを、帰りてもしばし音なければ」には、この場の主体は状況から資盛であることがわかるが、その人物をとりあげ、説明しようという意識はない。又、隆信歌群の直前は、

はじめつかたは、なべてあることとおぼえず、いみじう物のつつましくて、あさゆふ見かはすかたへの人々も、まして男たちも、知られなばいかにとのみかなしくおぼえしかば、手習ひにせられしは、

である。こども、資盛のことを語っていると意識せずに描かれているようである。同様に、119歌詞書「人の心の思ふやうにもなかりしかば」、122歌詞書「いと久しくおとづれ

ざりし頃」にもうかがえるように、資盛のことは誰という説明を加えないでも済む人物、言わば「人」という代名詞でこと足りる人物であつた。右京大夫にとつて資盛は、自明の存在として意識しないで済む、自己と一体化した対象であつたと思われるのである。

「よ人よりも色好むと聞く人」として登場した隆信は、表記上は、143歌詞書に「祭の日、おなじ人」として記されて以後は登場しない。145歌以後は、隆信とも資盛ともたれるような曖昧な表現である。それは、曖昧なままにしよとする意図<sup>26</sup>があつてのことではなく、資盛とのかを記すという意図から生まれたことなのである。資盛のことは、ことわる必要性がないのである。一方、隆信の方は、一連の贈答が終わり、新たに始まる時は、143歌、詞書「祭の日、おなじ人」としてことわらなければならぬ存在だつたのである。145歌以降にも、隆信との贈答が認められるとすれば、この143歌は、「祭の日、おなじ人」のような人物を特定する表現はとらなかつたであらう。何も記さないか、145「人のもとへ」、147「あれより」のような、さりげない表現ではなかつたかと想像される。隆信は、関係を明示しなければならぬ存在として意識されていたのである。この場面にあつても、右京大夫は、隆信との贈答を資盛との贈答



に読み替えるという大胆な虚構を行なっていると考えられる。この目的は、数少ない資盛との贈答歌を埋めるということであつたろうと考えられる。

## 五

いわゆる隆信歌群と考えられている135歌～154歌までは、135歌～144歌までに縮少させて考えるべきだと思われる。隆信との贈答は、隆信の執拗な求愛を描き、隆信の心を許しそうな気配を見せながらも、最後は敢然と拒否した姿を描いている。資盛に対して、貞操を守った自己を語ったのである。隆信との贈答は、それ自体の意味を言えば、隆信の求愛にも心動かされず、一途に資盛を愛したことのあかしとして存在する。ただ、それだけの意味であつて、資盛との関係に苦しみながらも、資盛に対して貞操を貫いた自己像の確立であつたと思われる。

『隆信集』を信じれば、隆信との恋は、初めは拒否しつつも、ついには契りを結び、そして失恋したという、世間一般の女性の恋の経過だつたと思われる。しかし、その事実を右京大夫は家集において隠した。139歌中において、詞書を虚構し、隆信の「浦やまし」の歌を自己流に解釈し、それに合う詞書を作った。更に、146歌以降の贈答において、

『隆信集』にある隆信との贈答歌を資盛との贈答歌として描いた。『隆信集』収載の贈答以外は指摘出来ないが、少なくとも右京大夫の心中は、資盛との贈答として描かれている。徹底した虚構化を図り、資盛とのままならぬ恋に悩み、傷つきながらも、資盛との愛を貫いた自己を造型したのであつた。

隆信歌収載の意図は、資盛とは、隆信に知られる程周知な恋愛関係があつたことを、そして、隆信の求愛を毅然とはねつけ、資盛に対して貞操を守ったことを示すためだったのである。このことは、現実の隆信との関係を反映していない。現実には隆信に失恋したのである。『右京大夫集』には、隆信との恋は隠され、資盛との仮構された恋と追憶とが描かれた作品であつたと思われるのである。

## 註

- (1) 但し、この「隆信歌群」の範囲も、通説的には一三五から一五四までと思われるが、一三五から一五七、一三五から一六二、一三〇から一六三までとする考え方もあり、この問題の微妙さを思わせる。
- (2) 佐佐木信綱氏校註『中古三女歌人集』（日本古典全書・朝日新聞社・昭和二十三年刊）
- (3) 上條彰次氏「建礼門院右京大夫集私見―隆信との恋をめ

ぐって」(『静岡女子大学 国文研究』第11号・昭和五三年)

- (4) 全面的ではないが、兼子佳子氏「建礼門院右京大夫集の研究―隆信との恋をめぐって―」(『名古屋大学 国語国文』49・一九八一年)、山本典子氏「建礼門院右京大夫集―小考―隆信との贈答歌をめぐって―」(『平安文学研究』第六十七輯・昭和五七年)、今関敏子氏「建礼門院右京大夫集」における愛と死―資盛と隆信をめぐって―(『女流日記文学講座 建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』第六卷・勉誠社・平成二年刊)、同氏「日記文学の時間」(『帝塚山学院大学 日本文学研究』第23号・平成四年)がある。

- (5) 上條彰次氏は「建礼門院右京大夫集」補説(『文林』第二十六号・一九九二年)において、「一三〇番歌から一六三番歌」は「内容的に資盛関係歌も多い」とする観点から「資盛・隆信歌群」と名付けられた。

- (6) 草部了田氏はその著、『世尊寺伊行女 右京大夫家集』(笠間書院・昭和五三年刊)において、「資盛に寄せた場合と、隆信の場合とは、全く感情の色彩が異なっている」(九一頁)、「この時代にあつては、社交的儀礼として、珍しい事ではない」(九六頁)と言われ、隆信との間に恋はなかったと考えておられる。又、町田友子氏は、『建礼門院右京大夫集』における隆信歌群の読みについて―『隆信集』功罪論を原点として―(『東洋大学文学部紀要 文学

論藻 国文学篇』第41集)において、「言われるところの三角関係の苦悩や、隆信への切ない思いなど感じさせない、実にカラリとしたウィットに富んだ両者の関係が見出せる」と考えておられる。一方、恋愛関係を認め、隆信歌集収載の意義については諸説あるがそれらは、町田友子氏の前掲論文及び、野沢拓夫氏「建礼門院右京大夫集」研究の展望と問題点(『女流日記文学講座 建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』第六卷・勉誠社・平成二年刊)一二〇頁に詳しいので、そちらに譲る。

- (7) 糸賀きみ江氏校注『建礼門院右京大夫集』(新潮日本古典集成・新潮社・昭和五四年刊) 六六頁。

- (8) この点に関して、本位田重美氏は「右京大夫集 二つの恋」(『国文学』第24巻10号・昭和五四年)において、「これは、単なる記憶違いではなく、両者それぞれ何かポーズをとっているように感じられる」と述べておられる。

- (9) 村井順著『建礼門院右京大夫集評解』(有精堂・昭和四十六年刊) 九六頁。

- (10) 久保田淳氏「建礼門院右京大夫集評釈」(『国文学』第十四巻第十五号・昭和四四年)

- (11) 樋口芳麻呂氏「隆信と右京大夫の恋」(『愛知教育大学 国語国文学報』第30号・昭和五一年)

- (12) 岡崎三智氏も「建礼門院右京大夫集」研究―家集における隆信の位置―(『東京女子大学 日本文学』第五十三号・昭和五五年)において、「一三六・六六七・一三七・

一三八というやりとりが続いたのではないだろうか」と、樋口芳麻呂氏と同様の見解を示しておられる。

- (13) 久保田淳氏は『国文学』第十五卷第一号(学燈社・昭和四五年)の一五〇・一五一(鑑賞)欄において、「又、隆信朝臣集の記述も、いかにも女に甘えられ、もてているように読者に感じさせるものとなっているのは、自分をよく見せたい気持が働いているからであろう。それが人情と言うものである。両集の詞書を対比することによって、當時者の記述がいかに客観性に乏しいものであるかがよくわかる」と考察されている。樋口芳麻呂氏(「藤原隆信の恋」『国語と国文学』昭和五十年二月号)、上篠彰次氏(註3同論文)も同様の見解を示しておられる。

- (14) 久保田淳氏は前掲論文(註10)において、「靡きもせず漂ふ物を」というのは、もとより、その愛する男(資盛)との恋が深く忍ぶべきものであったからだが、結果的には、他の男への半ば無意識的な媚態ともなっている」と考えておられる。

- (15) 樋口芳麻呂氏も前掲論文(註11)において、同様に「負けずにやり返した右京大夫の答歌である」と考えておられる。

- (16) 野沢拓夫氏「建礼門院右京大夫集に関する一考察―隆信との交渉の記事をめぐる―」(『日本大学校丘高校 研究紀要』第七号・昭和五一年)

- (17) 現在はこういうお考えではないようである。

- (18) 三木紀人氏「遅く来た色好み―隆信」(『国文学』第二十一卷第十一号)

- (19) 「右京大夫家集の方は、隆信集に比べて、非常に脚色的な意図をもって、書かれている：右京大夫と隆信との間に於ても、遠慮のない親しさから、歌の贈答を行なった場合、お互いが適当に詞書を附して、残した事もあったであろうと思われる。そういう結果が、今日、二つの詞書として、残ったのではないだろうか」(一〇四頁)と推測しておられる。

- (20) 註18に同じ。

- (21) 久保田淳氏は前掲論文(註10)において、「右京大夫も『色このむ』女房であったと言えなくもない」と言われている。

- (22) 本位田重美著『評註 建礼門院右京大夫集全釈』(武蔵野書院・昭和五五年刊)一二八頁。但し、久保田淳氏は前掲論文(註13)で、「『なにごともしてあらで』を『万事思ふやうにゆかなくて』とするのはいかが」と言われ、「さてあらで」は「そのままで(即ち、深い関係に至らないままで)なくて」と考えておられる。

- (23) 隆信との恋の後悔を否定する論を、佐佐木信綱氏(註2同書)飯田正一氏(「建礼門院右京大夫集の性格」『関西大学 文学論集』第一卷第一号・昭和二十六年)、草部了円氏(註6)、兼子佳子氏(註4)、町田友子氏(註6)は述べておられる。

(24) この考えに立つて今関敏子氏は、(註4) 七一頁において、『くやし』は：資盛との恋には全く使われない語であることに注意したい」と述べておられる。

(25) こうした臚化の問題について、飯田正一氏は、前掲論文(註23)において、「ここでは作者が自己を全身的に隠さうとしてゐるのではないとしても、少くとも、隆信との恋愛からは身を隠さうとしてゐる一種のポーズが感じられる：事実そのものを越えたところに、彼女自身の語らうとする事柄があつたのであらう。資盛との關係を中心にしていへば、隆信との交渉は、單に、偶然の一事件だつたといへるのかも知れない。彼女にとつて、資盛への愛情と思慕が唯一の眞実である以上、その眞実を主張することこそ、彼女にとつて絶対だつたのである」、町田友子氏は、前掲論文(註6)において、「隆信抜きでも資盛との恋は、充分描けたと思われる。そこに隆信歌採用の何らかの必然性がある」とすれば、それはむしろ彼の歌そのものに理由があると言ふべきではないかと考える。つまり、作者が一連の恋歌によつて描きたかつたのは、言われるところの三角關係の世界ではなく、より象徴化され、美化された、恋の憂鬱や苦悩そのものだつた」、渡辺静子氏は、その著『中世日記文學論序説』(新典社・一九八九年) 七四頁において、理由には二つのことが考えられるとして、「その一つは、この頃の右京大夫にとつては、二人とも違つた意味で捨て切れない相手であり、いつも交錯して作者自身の意識にのぼつ

てくるという同時存在を是認していた人物であつたということ。その二つは、作者と隆信との關係は、この集製作上の動機においては、重要な役割を果たしているにも拘らず、集構成上においては隆信の歌は、さ程重要な存在ではなく、それにひきかえ資盛の歌の存在は重要で、この集の形成には資盛の歌がなくてはならぬものであつた。そのために前述のような臚化表現をとつた」と考察しておられる。

(26) 飯田正一氏は、前掲論文(註23)において、隆信との贈答を、「資盛との贈答と見れば見られるような排列の形態を取つてゐるのである」、上條彰次氏は、前掲論文(註3)において、「明らかに資盛との贈答である歌を隆信とのそれとも見れば見られるような微妙な配列で組み込ませる二重的構成を、意圖的に取つてゐる」と考察されている。

(27) 虚構の問題に関して、糸賀きみ江氏は、『建礼門院右京大夫集』の日記文學的性格(『女流日記文學講座 建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』第六卷・勉誠社・平成二年刊) 二三頁において、「家集はそれぞれに自分をよく見せたい意識が働いていて、改変しているとも考えられる。もしも自分だけが見るひそかな手記だつたら、そのような虚構あるいは改変は必要なのではなからうか。ありのままでは、と考えられもしよう。作品としての構成意識や虚構性がうかがえるということは、自分だけの手記の段階には留まっていけない、他人の眼を意識した日記文學作品としても享受が可能なことを物語つていよう」、

飯田正一氏は、前掲論文（註23）において、「家集は資盛との関係を通じて彼女を描いた自叙的日記であったといふことである。同時に、作者が一種のフィクションを試みてゐるといふことは、右京大夫集が日記といふよりは、寧ろ、或る意味で物語と呼ばれるのにふさはしいものを持つてゐるといへるかも知れない」と考察されている。

〔付記〕

テキストとして、糸賀きみ江氏校注『建礼門院右京大夫集』（新潮日本古典集成）、『私家集大成』、『新編国歌大観』を用いた。

尚、本論文は、平成三年度全国大学国語国文学会・中世文学会秋季合同大会において口頭発表したものを、加筆補訂したものである。席上、御教示賜りました、久保田淳先生、上篠彰次先生、三木紀人先生に厚く御礼申し上げます。